新潮文庫

劇場

サマセット・モーム

龍口直太郎訳

新潮社

"Theatre"
by
W. Somerset Maugham
Originally copyrighted by A. P. Watt & Son
Copyrighted in Japan by Shinchosha through
arrangement with Charles E. Tuttle Co.

劇　場

定価 170 円

新潮文庫

昭和三十五年十一月十五日発行
昭和四十二年七月二十日七刷

訳者　龍口直太郎

発行者　東京都新宿区矢来町七一　佐藤亮一

発行所　東京都新宿区矢来町七一　株式会社　新潮社
電話東京二六〇局一一一一(大代)
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・光邦印刷株式会社　製本・大進堂製本所

© Printed in Japan

新潮文庫

劇場

サマセット・モーム
龍口直太郎訳

新潮社版

1444

劇

場

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

ドアがあいたので、マイケル・ゴセリンは顔をあげた。ジューリアがはいってきた。
「やあ！　あと一分とは待たせないよ。いまちょうど、二、三通の手紙に署名をしていたところなんだ」
「おいそぎにならなくていいのよ。あたし、ただ、デノラントさんとこにどんな座席の切符がお届けしてあるのか見にきただけなんですから……。あの若いひと、ここでなんのお仕事しているんですの？」
いかにも舞台馴れしている女優らしく、言葉に身振りを合せてゆくいつものくせで、彼女は、そのきれいに髪をととのえた頭を、いま通ってきたばかりの部屋のほうへ動かした。
「あれは計理士だ。ローレンス・アンド・ハンフリーズ法律事務所からきたんだが、ここへきてまだ三日にしかならんのだよ」
「とても若そうね」
「ちゃんと年期契約の事務員なんだ。自分の仕事のことは心得ているらしい。ただ、ここの会計の方法がまだよく呑みこめないんだね。劇場というものがこんなに事務的な方法で経営されるなどとはつゆ思わなかった、なんていってたよ。町の会社のなかには、経理があんまり乱脈で、そ

んなのにひっかかると白髪になってしまうほど頭を使わせられるのもあるそうだね」
　ジューリアは、夫の美しい顔に満足の色が浮かんでいるのをみて、ほほえんだ。
「なかなか如才のない青年ね」
「彼の仕事も今日はもう終りだ。僕たちで連れて帰って、一緒にかんたんな昼食でも、と思っていたところさ。あれでなかなかの紳士なんだよ」
「でも、それだけの理由でおひるにお招びすることができますかしら？」
　マイケルは、彼女の語調にふくまれたかすかな皮肉には気がつかなかった。
「君の気がすすまなければ、誘わなくてもいいんだよ。僕はただ、彼が喜ぶだろうと思っただけなんだ。なにしろ、おそろしく君を崇拝しているんだからね。こんどの芝居は三度も見にいったんだそうだよ。君に紹介してもらいたくてうずうずしてるんだ」
　マイケルがボタンを押すと、すぐに秘書がやってきた。
「手紙に署名しておいたよ、マージェリー。今日の午後、僕はどんな約束があったっけね？」
　ジューリアは、マージェリーの読みあげる名前のリストをぼんやり耳にしながら、よく見なれた部屋ではあるが、なんということなくあたりをみまわした。それは、一流劇場の支配人にはいかにもふさわしい部屋だった。壁は、りっぱな装飾家の手になった（しかも原価でやってくれた）鏡板づくりで、ところどころにツォッファニ（イギリスで活躍したドイツの肖像画家）やド・ワイルドの描いた劇場風景の版画がかけてあった。肘掛椅子はゆったりと大きく、掛け心地がよい。マイケルは、おびただしい彫刻の施してあるチペンデール式の椅子（チペンデールは十八世紀末の家具師。きゃしゃな作風で有名）に腰をおろしていたが、これは模造品ながら、有名会社の製品であった。彼の前にあるテーブルもチペンデール式で、脚

は重々しい球とけだものの爪足との組み合わせで出来ており、非常にがっしりしたものであった。テーブルの上には、彼女の写真をはめこんだ大きな銀の額縁が立てられ、それと釣合のとれるように、もう一方の側には、かれらの息子ロジャーの写真が立ててあった。この二つにはさまれて、彼女から彼の誕生祝いに贈った豪華な銀製インクスタンドが置いてあり、そのうしろには、赤いモロッコ革の外箱にはいって、厚ぼったく金めっきした書類籠があった。これには、彼が自筆で手紙を書きたいときに使う私用箋が入れてあるのだった。この便箋には、所番地も一緒に、シドンズ劇場、と印刷してあり、封筒には、野猪の首の下に、「咎めなき身にそしりなし」（ホモ・メ・イムプネ・ラケスシット　元来はスコットランドの標語である）という標語をつけた彼の家の紋章が印刷してあった。彼が劇場関係のゴルフ大会に三連勝して獲得した銀のカップには、一束の黄色いチューリップが挿してあった。これはマージェリーのこまかい心づかいをあらわすものだった。ジュ〜リアは彼女のほうを反射的に眺めた。髪を赤く染めて短く刈りこみ、しつこいほど濃く口紅を塗ってはいるが、中性的な、いかにも秘書タイプの容貌であった。マイケルの秘書を五年間もつとめているのだから、もはや彼のことは隅から隅まで知っているにちがいない。だが、まさか彼と恋におちいるようなバカな女ではないだろう——。

マイケルは椅子からたちあがった。

「やあ、どうも待たせたね」

マージェリーは黒の中折帽を彼に渡し、ドアをあけて、二人を送りだした。二人が事務室にはいると、さきほどジュ〜リアの注意をひいた青年が、ふりかえって、たちあがった。

「ミス・ランバートを紹介しよう」

とマイケルはいって、こんどは彼女にむかうと、赴任国の君主に随行員（アタッシェ）をひきあわせる大使といった身振りで――

「こちらは、ご親切にもわれわれの乱雑な会計をきちんとととのえてくださる紳士です」

青年の顔はまっかになった。彼はジューリアがすぐにやさしくほほえんでくれたので、ぎこちなくほほえみかえした。彼女は心をこめて手を握ったが、そのとき彼の掌が汗ばんでいるのに気がついた。そのどぎまぎしたようすはなかなかいじらしいものだった。セアラ・シドンズ（一七五五―八三、イギリス大女優の一人）に紹介されたときも、ひとびとはきっとこんなふうだったにちがいない。彼女は、マイケルが青年を昼食に誘おうかといったとき、あんまりいい顔をしてみせなかったことを思いだした。そしてまっすぐに青年の眼をみた。もともと彼女の瞳は大きく、深い暗褐色で、星のような光をもっていた。そしてこんな場合、それとなく興味を感じているような色をみせたり、親しげな優しさをあらわしたりすることは、彼女にとってはなんのぞうさもないことだった。というよりも、それはもう、顔のそばをとびまわる蠅を払いのけるのと同じくらい、むしろ本能的なものであった。

「よろしかったら、ご一緒にいらして、おひるをめしあがって下さいませんか？　あとでマイケルが車でこちらへお送りいたしますわ」

青年はまたあかくなって、その喉ぼとけが痩せた咽喉でごくりと動いた。

「ご親切に、たいへん、どうも――」

困ったような顔で、彼は自分の服を見やった。「あんまり汚い恰好しているもんですから……」

「うちへいらしてから、お顔を洗ったり、ブラシをかけたりなさるといいわ」

車は楽屋口で待っていた。クローム鍍金仕上げの黒い細長い車体には、銀色の革が張られ、マイケルの家の紋章がいかめしく両側の扉に描いてあった。ジューリアが先に乗りこんだ。

「あたしの横におかけなさいな。マイケルは運転しますから……」

かれらはスタンホープ・プレイスに住んでいた。そこへ着くと、ジューリアは、執事に、青年を洗面所へ案内するようにいいつけた。彼女が二階の客間に上がって、口紅をつけていると、そこへマイケルがやってきた。

「支度ができたらすぐ来るようにいっておいたよ」

「ところで、あのひと、なんていう名前ですの？」

「それが、かいもくわからないんだよ」

「あら、それじゃいけませんわ。あたし、サインブックに名前を書くように頼んでみましょうかしら」

「よしなさい。そんな値打のある男じゃないから……」

マイケルがそのサインブックに署名を依頼するのは、非常に著名な人物だけに限られているのだった。「二度と連れてくるわけじゃないんだし」

このとき、青年がはいってきた。さっき車のなかでジューリアは、青年の気持をくつろがせようとして、あらゆる努力をしたのだったが、彼は今でもやはり、ひどくはにかんでいた。カクテールの用意ができていて、マイケルがグラスに注いだ。ジューリアが煙草を手にとると、青年はマッチに火をつけてくれたが、その手があまりに慄えて、なかなか煙草のそばまでもってこられそうにもないので、彼女はその手をとって、支えてやった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「かわいそうに、きっとこれがこの男の生涯でいちばんすばらしい瞬間なんだわ。たいへんな得意顔で、自分の家族に話してきかせるのよ。事務所じゃあ、とんでもない英雄になるでしょうし」

ジューリアが、心の中で呟くときは、他人に話をするときとはがらりと口調が変って、ひどく乱暴になるのだった。彼女は、最初の一吸いを、よろこばしい気持でふかぶかと吸いこんだ。たしかに、彼女がただちょっと昼食をともにして、一時間近く話し相手になってやるだけで、ひとりの男が、そのつまらぬ小さな世界でひどく幅が利くようになるのだ、そう思うと、気持がよかった。

青年は、ずいぶん努力をして、やっとひとこと、意見めいたことをいった――

「とてもすばらしいお部屋ですね」

彼女は美しい眉をこころもちあげて、ちらとこぼれるような微笑をみせたが、これは舞台で彼女がよくやる表情なので、彼は幾度もみて知っているにちがいなかった。

「お気に召してなによりですわ」

彼女の声はやや低く、ほんのすこしかすれていた。彼の言葉で胸の重荷がおりた、といった口調だった。

「うちのものたちの間でも、マイケルはとてもすばらしい趣味をもっているって話しあっておりますのよ」

マイケルは満足そうに室内を眺めた。

「僕はずいぶん経験を積んだからね。僕たちの舞台装置はいつでも僕がデザインしてるんだよ。

もちろん、荒仕事をやってくれる男は雇ってあるけれども、思いつきはみんな僕のものなんだ」

かれらは二年前にこの屋敷へ移ってきたのだった。ちょうど地方巡業に出かける間際に、彼も、そしてジューリアも、費用のかかる装飾家に屋敷をまかせてしまったのを知ったが、あとで劇場関係の仕事をまわしてやる代りに、実費で、二人が帰るまでに仕上げておく、ということにさせたのだった。だが、そんな退屈な話をこまごまと、名前さえ知らぬ青年にきかせたところで仕方がなかった。室内装飾品は、古典的なものと近代的なものとがほどよく調和していて、マイケルが、どうみてもおえらがたのお屋敷だね、といった言葉もうなずけるくらい、たしかにりっぱな趣味だった。が、ジューリアは、どうしても自分の好きな寝室がほしいといってきかず、終戦以来住んでいたリージェント公園の、もとの家にあるのがすっかり気に入っていたので、それをそっくり運んでこさせた。ベッドと化粧台とはピンクの絹、長椅子と肘掛椅子とは淡緑色の布で覆われていた。ベッドの上からは、まるまると肥った、かわいい金色の童児天使（チェラブズ）がピンクの笠のついたランプをぶらさげ、化粧台の鏡のまわりも、まるまると肥った、かわいい金色の童児天使たちがとりかこんでいた。繻子木（インド産の良質の材木）のテーブルの上には、男女の俳優や、イギリス王室の皇族がたの署名入りの写真をおさめた豪奢な額縁が飾ってあった。例の装飾家はそれらのものをみて、ふんと嘲笑するように眉をあげたものだった。だが、ジューリアがほんとうにくつろげるのは、屋敷中でこの部屋だけなのであった。彼女はこの部屋で、金色の小椅子に腰をおろし、繻子木の机にむかって、手紙を書いたりするのだった。

食事の用意ができたとのしらせで、みんなは階下へおりていった。

「どうぞたくさん召しあがって下さいね。マイケルやあたしは、いつもほんのちょっぴりしかい

ただかないんですから……」

焼ひらめ、カツレツのグリル、ほうれん草、果実の蒸煮――実際の料理はそれだけのものだった。ひととおり飢えを満足させるだけで、軀によけいな脂肪をつくらぬように考えられた食事であった。だが、マージェリーから昼食に客のあることを注意されたコックが、いそいで、じゃがいものフライをつくって用意していた。みた目にもパリッと揚っていて、いかにもおいしそうな匂いだった。青年だけがこれを食べた。ジューリアはうらめしそうにちらっと見やってから、かぶりをふってことわった。マイケルは大まじめに、ふしぎなものを見るといった面持でちょっとみつめていたが、その瞑想からさめて、はっと我に返ると、いや僕はいらんよ、といった。ジューリアとマイケルとは、食卓の両端の、りっぱなイタリア風の椅子に腰をおろし、青年は、あまりかけ心地のよくない、しかしこの部屋にはぴったりした椅子にかけて、その真中にはさまっているのだった。ジューリアは、彼が食器テーブルを眺めているのに気がついたので、愛想よくほほえみながら、ちょっと身をのりだして、「あの、何か――？」とたずねた。

彼はさっと頬を染めた。

「パンをすこしいただけませんでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

彼女は執事に眼くばせした。執事はちょうどマイケルのグラスに辛口の白ぶどう酒を注いでいたが、すぐに部屋を出ていった。

「マイケルもあたしも、パンをぜんぜんいただきませんの。あなたが召しあがることに気がつかないなんて、ジェヴォンズもほんとうにうっかりやですわね」

「パンを食べるってことは、やっぱりひとつの習慣だね。決心さえすれば、びっくりするほど簡単にやめてしまえるもんだよ」

「でもマイケル、ふつうの方だったら、針金みたいに痩せてしまいますわ」

「僕はふとるのがいやでパンを食べないんじゃないよ。意義を認めないからなんだ。ちゃんと運動をしているんだから、けっきょくは何を食べたってかまわないわけだがね」

五十二歳になっても、彼のりっぱな容姿はまだすこしも衰えをみせていなかった。若い頃には、そのふさふさと波うつ栗色の捲毛と、すばらしい肌と、青く深い大きな瞳と、よく通った鼻筋と、きゃしゃな耳とで、彼はイギリス劇界きっての美男俳優だった。ただ、唇の薄いことが、欠点といえばいえるだけで、六尺豊かの上背があり、態度物腰も堂々としていた。彼が、父親と同じ軍人にはならず、舞台人になってしまったというのも、この人眼を惹く美貌のせいだった。その栗色の髪も、すっかりごま塩になってしまった今では、ずっと短く刈りこんでいた。顔はまのびがして、小皺が多く、肌ももはや熟した桃のやわらかさを失って、冴えない色をしていた。だが、そのすばらしい瞳や、端麗な容姿は、まだまだ水際だった美男ぶりだった。五年間の従軍生活から軍隊式の挙動をすっかり身につけてきたので、彼を知らないものからは（もっとも、なんのかんのと彼の写真がしょっちゅう絵入新聞に出ているので、彼を知らないものはほとんどいないのだが）まったく高級将校だと思われるにちがいなかった。はたちの頃から体重に増減がなく、もう何年間も、晴雨にかかわらず毎朝八時には起きて、セーターと半ズボンだけでリージェント公園を一回り駆けてくる、というのが彼の自慢だった。

「ランバートさん、秘書の方からうかがったんですが、けさ下稽古があったんですってね。また

新しい出しものに手をつけられたんですか？」
　と青年がいった。
「とんでもない。今の芝居で精いっぱいだよ」
「マイケルが、みんなすこしだれてきたからって、下稽古をやらせたんですのよ」
「やってみてよかったよ。僕がやれといわなかった仕草がはいっていたり、台本からずいぶん離れちゃったりしていたんだからね。もともと僕は、原作者の台詞どおりにやれという点じゃ、たいへんなやかましやなんだ。しかしどういうものか、近頃の作者が書くものにはろくな台詞がないね」
「あたしたちのお芝居をごらんになりたいのでしたら、マイケルがきっと喜んでお席をとってさしあげますわ」
　とジューリアはやさしくいった。
「ぜひもう一度いきたいと思います」と青年は熱心にいった。「もう三回拝見しましたが……」
「まあ！　ほんとうですの？」
　ジューリアは驚いて大きな声をだした。しかし、マイケルがさっきそれについて話したことは、ちゃんと憶えているのだった。
「もちろん、あれはそんなにまずいお芝居じゃありませんし、あたしたちの目的にはぴったりと合っているんですけれど、でもだれにしろ、三度もごらんになりたい人があるなんて、あたし、ちょっと想像もできませんわ」
「僕がみにいったのは、芝居そのものより、むしろ、あなたの演技なんです」

「とうとう白状させたわ」とジューリアは心の中で呟いた。それから声にだして――
「さいしょ原作を読みましたとき、マイケルはあんまり賛成じゃなかったんですのよ。あたしの役がどうもぱっとしないっていうんで……。ほんとに、スターのやるような役じゃないんですものね。でも、あたしは、その役を何かちがったふうにやりこなせると思いましたの。もちろん本読みのときに、もう一人の女のひとの分をずいぶん削ってしまいましたけど……」
「脚本を書き直したというわけじゃないんだよ。ただ、作者が僕たちに渡したものとはかなり離れた芝居になったことはたしかだがね」
「舞台のあなたは、ほんとにすばらしいです」
と青年はいった。
(「ちょっとかわいいところがあるわ」)
「お褒めにあずかって恐縮ですわ」
「ジューリアの機嫌をとっておきたまえ。帰りにきっと自分の写真をくれるよ」
「ほんとにいただけますか?」
彼はまた頬を染めて、眼を輝かした。
(「ふふ。かわいいったらないわ」)
彼は、とくに美男というほどでもなかったが、なんにも飾らないあけっぱなしの顔で、そのはにかむところに魅力があった。髪は明るい褐色の捲毛だったが、それをべったり撫でつけていた。せっかくのウェーヴをチックでむりに抑えたりしないで、それをうまく生かしておけば、もっと風采があがってみえるだろうに、とジューリアは思った。血色はいきいきしているし、肌に

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com